

建設汚泥等Rテーマにウェブセミナー

泥土リサイクル協会 先駆的な利用事例紹介など

実際の工程について詳しく解説した



(二社)泥土リサイクル協会(愛知県稲沢市、木村孟理事長)は1月14日、セネコン関係者等50人を対象に「建設汚泥リサイクルにおける先駆的な利用事例の紹介」と題したウェブセミナーを開催した。セミナーでは野口真一事務局長が登壇し、これまで解説してきた建設発生土や建設汚泥に関する分類や有価物

の当該性などを確認しながら、最新の事例について施工管理者や廃棄物処理業者の立場などを考慮して説明した。

汚泥の高圧噴射攪拌工法(多量処理)、泥土圧式シールド掘削土砂、調整池堆積土砂を埋め戻し、盛土材としてリサイクルしたケースについて説明した他、個別指定制度の利用については、鋼管ソイルセメント杭余剰泥土のリサイクルとして橋脚の基礎に埋め戻したケースについて解説した。有償譲渡について

は連続地中壁工事排泥を高速道路の路体材料としてリサイクルした事例を、また産廃には当たらないものの、事例として建設発生土の河川浚渫土砂を築堤材料として使用した事例を紹介した。それぞれ事例については、使用した機器、泥土の量や種類、含水比、実際に使用した薬剤などの種類や量を具体的に提示しながらポイントを解説した。これらの事例ではさまざまな表彰を受けたケースも多く、動画なども活用しながら、実際の工事での流れや、行政とどのような話し合いを行ったかについても具体的に説明した。

野口氏は事例を紹介した後、こういった工事での処理土ならびに改良土等の有効活用

技術のポイントとして、「利用用途を明確にすること」、「万能の固化工材はないこと」、「混合攪拌する技術」の3点を挙げた。これらについては、まず利用先、そして利用用途を明確にすることが最も重要で、さらに固化工材についても、泥土特性や利用用途に応じた固化工材を用いなければならぬ。その際は有機分やpHなどとともに溶出基準、含有量基準に留意して選択することが重要であるとした。また混合攪拌する技術については、安定的かつ継続的に満足するため

の技術が重要であると、「バックホウでの攪拌だけではなく、泥土や現場の状況に応じた対応が必要」と述べた。さらに野口氏は泥土処理技術のポジションングを提示。処理費の工程や処理後の泥土の質、対応する泥土のコーン指数などをもとに、それぞれに適合する処理技術を示した。野口氏は「排出事業者、中間処理業者、材料機械メーカーなどそれぞれ向けに、これまで蓄積した15年分のデータからさまざまな提案ができる」と話した。